外国語学習・教育・研究の視点から見た学習者への提言

熊本県立大学文学部
英語英米文学科
教授　レイヴィン　リチャード

はじめに

報告者は今英語を教えながら、外国語の学習についての研究をしている。また、英語の先生になりたい学生に、学習の仕方や教え方についても教えている。「第二言語習得」という学問は、数十年の歴史を持っているものの、時々疑問に思うのは、その学問が本当に理解の助けとなっているかどうかと言うことである。長年理論を教えていると、その理論自体が「もの」となり、実際の教えること、学習することとのすき間ができる恐れがある。

若いとき、報告者はフランス語、ドイツ語、ラテン語、中国の普通話と広東語、日本語を勉強した。その頃は、自分の研究と教え方はしっかりと自分の学習に基づいていたと思う。しかしあれから数十年が経ち、その繋がりが薄くなっているではないかと言う懸念から、最近は新たにタイ語を勉強し始めた。その学習者としての経験を出発点とし、教えて来た経験、研究してきた経験を加味して学習者への提言をしたいと思う。

一、背景

私はイギリス生まれである。生まれたのが、1960年代で、外国語を初めて勉強したのは７０年代であった。最初に勉強した外国語は、当時ほぼすべてのイギリス人と同様に、フランス語であった。それを勉強し始めたのは、小学校の最後の学年であった。

イギリスは、中学校、高校が一緒になっていて、合わせて **secondary school** と言います。**Secondary school** の最初の三年間では外国語はフランス語だけで、４年目からは選択科目として、ドイツ語とラテン語を勉強することが可能でしたので、その二つの言語を選ぶことにした。

イギリス人としてヨーロッパのその他の言語を学んですぐ分かることは、形態素の観点から英語が結構簡単な言語であることである。英語には三単現の s があり、過去形の **ed** や不規則動詞のいろいろな形があり、また **ing** もあるが、動詞の活用はそれを覚えれば大体済むものである。フランス語を勉強すると、現在形でも活用が複雑で、いつつの形を覚える必要がある。ドイツ語では、動詞の活用がさらに複雑で、また名

詞、形容詞、冠詞の語形変化が性、数、格によって決まり、表のように暗記した覚えがあります。とても複雑であった。

der den dessen dem
die die der der
das das dessen dem

ドイツ語には格が四つあるのに対して、ラテン語では七つがあり、さらにキツイ暗記の仕事が増える。しかし、当時はラテン語の人気がどんどん落ちていたことを受けて、イギリスの政府は、それを歯どめするためにカリキュラムを簡単にしたばっかりであった。現代言語と同じように、会話をしていた。それでラテン語の勉強は楽しかったが、正しく書けるように語形変化の暗記や、読んだ文書を理解できるような勉強は不十分であったので、今では前述のドイツ語のような語形変化の表は全く覚えていない。

二、タイ語を学ぶ経験

私に２年前にタイに半年間を過ごす機会が与えられた。そこで、タイ語を学ぶことにした。先述べたように、今まで、たくさんの外国語を勉強する経験があり、勉強を始めた時にタイ語の勉強にも結構自信があった。

しかし、いつの間にか一ヶ月、二ヶ月が経ち、覚えたことが非常に少なく、進歩は全く想像していたようなものはなかった。時間がどんどん過ぎていって、不安になってしまった。タイ語は英語や他のヨーロッパの言語には似ていないし、また２０代で学んだ中国語とその系統の言語にも似ていない。聞き取ったものをメモで記録をとり、後でそれを覚える、できたら自分で会話においてそれを使う、少なくとも再び他の人の話の中で出てきた時にその時また気づく、という以前から使っていたサイクルに極めて乗りにくいことから、確かな学習プロセスが定着しない。

時間がかかったが、三ヶ月くらいのところ、ようやく勉強の仕方が定着した。先生を見つけ、**Skype** でレッスンを定期的に受けた。レッスン中に出てきた新しい言葉、表現をタイ語ロマ字で書いてもらって、レッスンが終わってから、一個一個を **flashcard** のソフトに移した。その **flashcard** のソフトを一日何回も利用して、次回までにすべてを暗記し、また似たような話題から次のレッスンを始めるようにした。それと同時に、一般の生活の中で、同じような表現を使う機会をなるべく見つけていた。

レッスンが土台となり、タイ語を記憶する力がついて、日常生活のなかで役に立ちそうな表現を同じように記録し、**flashcard** のソフトに入れ、暗記するのに努めた。

それらもレッスンの時になるべき使うようにし、その正しい使い方を確認したりした。

三、第二言語習得について

第二言語習得という学問が広く知られるようになったのは、1980年代の前半であった。**Stephen Krashen** が一連の論文と本を発表した。**Second Language Acquisition and Second Language Learning (Krashen, 1981)** と **Principles and Practice in Second Language Acquisition (Krashen, 1982)** が代表的な作品である。**Krashen** の書くスタイルがとても良く、本が読みやすい。また、自分の考えが正しいと決心をしていて、はっきりとした提言をする。彼が言うことを簡単に纏めることにする：

• 外国語をマスターすることは、母語をマスターすることとは基本的に同じ過程である。つまり、その言語が話されているのを聞けば良い。意味が通じれば、自然にその言語をマスターしていく。**Krashen** が言うには、メッセージを理解することのみによって言語が習得される。

• 教員の役割は、主に「理解可能なインプット」を提供することになる。最初の段階では、簡単な指示を与えたりして、その後は読みやすい読み物を提供したりする。

• その自然な過程は習得と呼びます。学習することは習得することと全く違うもの。学習する、つまり意図的に何かを勉強することはあまり役に立たない、しかもそのように勉強した知識は、後で習得した知識には変換することが不可能である。

• 言語習得には、自然習得順序というものがあり、外国語の文法形態素は決まった順番で習得される。この仮説を信じれば、意図的に文法項目を教えることあるいは学ぶことがますます意味がなくなる。なぜならば、習得する順番が決まっていて、理解可能なインプットさえあれば、教育や意図的学習がなくても、自然に習得していく。

もう一つ **Krashen** の強みは、**Tracy Terrell** という才能のある外国語の教師と組むことによって、教授法、シラバスの組み方、等を含む統括的なアプローチを提案することができた **(Krashen & Terrell, 1988)**。

ここで述べた複数の理由で、Krashen の学問に対して与えた影響が、そのアイディアの学問的内容に値するものよりもはるかに大きかった。今でも、ほとんどの第二言語の教科書は彼の考えを出発点にしていて、学生さんの中では有名な学者を彼一人しか覚えていない人もいる。

みなさんは、ご自身の日本語、あるいは他の言語の勉強の経験を踏まえて、**Krashen** のいうようなことを如何お考えですか。

Krashen の主張は、ある程度一般の人の直感や経験に合っているからあれだけ影響が大きかったと思う。外国語を勉強するときに、たくさんを聞けば、たくさんを読め

ば、確かに効果は随分あると思う。また、外国語を学ぶことは母語を学ぶこと、或いは自転車乗りや水泳と同じだと思えば、彼の主張は納得できると思う。逆に言えば、何も聞かずに、何も読まずに外国語を覚えるということを想像することができないので、**Krashen** の仮説はある程度当然なことであると言う考え方もある。そのため、あれからの第二言語習得の発展は、**Krashen** の考えをベースにし、修正したり、上乗せをしたりすることで進んだと言えるでしょう。

その **Krashen** の考えに対する最初の修正は、**Merrill Swain** らによる指摘であった。カナダでのイマージョン教育において、外国語の理解度が高い生徒でも、簡単な文法のミスを多く犯していたことに気づき、難しい文を書かせたり、言わせたりすると初めてその生徒が正しい言い方に気づく、という報告をした。生徒が自分で問題点に気づかない時に、先生が指摘し、訂正したりする場面がそれで再び認められるようになった。

また、とても影響が大きい研究の一つは、**Richard Schmidt** の **noticing**（気づき）の研究であった。**Schmidt** は、**input** の意味を理解するだけでは、脳内の言語のシステムが発達しないと主張し、言語の形に注意が行かなければ、それを習得することはないだろうと言う。言い方を変えれば、**Krashen** が言う、メッセージを理解することだけによって言語が習得されるという考えは、重要な問題点を論じることを回避しているとも言える：重要なことは、そのメッセージを理解した時から、どの過程入ってきた情報が聴き手の脳内の言語知識に変換したか？その過程にはどのような限界があるのか？その過程は、教員が助けることはできないのか、など、いろいろな問題が改めて考えることができた。

先ほど、**Merrill Swain** の話をしたが、**Swain** と **Lapkin (1995)** はインプットだけでなく、時には **output** も重要な役割を果たせると主張した。研究の世界の中にいれば、それを冷静に受け止めて、その役割は具体的に何か、インプットとアウトプットのバランスをどう図るべきか、などという疑問が思い浮かべ、面白いかつ貴重な研究課題ができる。

しかし、話がどれだけ常識から離れたかを考える価値があると思う。たった数年間の期間であったが、**Krashen** の仮説が普及してから **Swain** が「**pushed output**」の考えを発表するまでは、第二言語習得という学問の暫定的なコンセンサスは、話す、書くことはほぼ無意味であるということであった。それは、数年間の研究者からの教師や一般の方へのアドバイスであった。日本では、一般の人と英語について話をすれば、「英語をもっと話さなければ上手にならない」というような意見が頻繁に出る。結局、研究者が言うことが「常識」と真反対となったが、数年後、**Swain** らの研究のおかげでまたある程度常識と再び一致したこととなった。やはり、革新的な研究が発表され

たら、簡単にそれを信じることなく、自分の経験や一般常識もある程度尊重すべきであろう。

四、報告者の提言

研究と教育だけをやっていると、言語を学ぶ難しさを実感しなくなる恐れがある。教職の学生でも、多かれ少なかれ、先生になることに意識を置くと、自分の英語を磨くことに重点を置かなくなる傾向もある。教員、研究者の長年の経験の後に、タイ語を学ぶことをきっかけに、学習者の立場から再び言語学習のプロセスを考えることができた。それを元に、幾つか提言をしたい。

音韻論的、文法的に、タイ語は私の母語の英語には似ていない。字も似ていない。また、自分が今まで勉強してきた他の外国語にも似ていないので、既存の知識基盤もそれほど役に立たないので、しっかりと取り組まないといけない。その点では、皆さんの英語や日本語の勉強とは少し違うかもしれませんが、それを元にいくつか提言したい。皆さんの外国語の勉強の参考になれば幸いである。

音韻論

どの言語にも学習者にとって難しい音素がある。大人になってからその言語を学ぶとそれらを全て完璧にはマスター出来ないのは確かであるが、一応発音できるが、早く話すと間違えるようなものはまた改めて練習する価値がある。

音素だけでなく、むしろさらに重要なのがプロソディーである、つまりリズムやイントネーションのことである。プロソディーはその言語システムの中心的なものであり、そのシステムの他の部分に密着しているため、それを本当に感じるようになれば、進歩への大きな一歩となる。県立大学の英文の上級の多くの学生でも、音節の感覚が弱く、前置詞、冠詞等を聞き逃すことが多いようである。

ワーキング・メモリー

作業記憶（ワーキング・メモリー）は、短期にものを記憶し、処理する能力である。タイ語を勉強し始めた頃に、日常の会話の中に出てきた新しい言葉はメモを取って覚えたかったが、メモをとるまでの数秒間の間でも忘れてしまっていた。それは勉強の大きな妨げとなって、なかなか勉強が始まらない気持ちとなった。

この問題の対処として、目的言語の **dictation**、歌詞の暗記、音読等をすることによって、その言語を記憶する力を育てたい。

語彙（単語）

日常生活でも、ある程度豊富な単語の知識が必要。例えば、家賃を払いたい時に、「～をしたい」というパターンを知っていても、「払う」と「家賃」という単語を知らなかったら、言いたいことを伝えることが難しい。逆に、「～をしたい」というパターンを知らなくても、「払う」と「家賃」を繋げれば意味は大体伝わる。単語は意図的に、そして定期的に勉強しなければ、なかなか覚えられないと言う厳しい現実がある。**Paul Pimsleur (1967)** は **spaced repetition**（間隔反復）の重要性を証明していて、また現在その原則に基づいたソフトは多く存在することから、そのソフトを手に入れて、覚えたい単語の flashcard を作り、暗記する習慣を是非定着させたい。

定型表現（語彙文法）

各言語の文法は複雑なシステムであり、教科書に載っている項目を順番に覚えるだけではなかなか系統的な知識にはならない。また、理解することに苦しむ場合もあり、また論理的に分かっていてもすぐには使えない知識が多い。

もっと身近な、直感的な勉強の仕方は、様々なフレーズや定型表現を覚えることである。日常生活で使える、有機的に出てきたものが良いのである。

簡単な例をあげると、タイ語では、大学の先生二人という言い方は、

aa-jaan	**tîi**	**má-hǎa-wít-ta-yaa-lai**	**sɔ̌ɔng**	**kon**
先生	に	大学	二	人

となる。

これを暗記すれば、タイ語の語順の感覚がある程度正確になるし、真似とちょっとした変化をすれば、

「私のマンションに住んでいる人」みたいなことを言えるようになる。

ブートストラップ

言語の習得の早い段階では、知識が非常に少ない。しかし、どこかから始まることが必要である。小さな知識の「核」が脳の中に存在し、それを多いに活用することによって、それに関連する知識をどんどん作り出すということになる。

それと関係する悪循環と好循環を意識しないといけない。私がタイに行った時の先ほど述べたような状況は一種の悪循環であった。つまり、聞き取った言葉のメモを取れなかった時、「何も覚えられない」、「進歩ができない」という気持ちになっていた。逆に、新しい言葉のメモを取り、それを暗記し、レッスンで活用し、それに基づいた

表現を教えてもらい、さらにそれを暗記し、次のレッスンと日常生活の中で使うというのは、好循環である。好循環に乗る機会に敏感になれば良いと思う。

自分の学習法とツールの組み合わせを作る

学習者一人一人は、好み、能力等の面において違う。一人一人が、自分に合うような教材、ツールを集めることは大事である。例えば、対話中心の教材であれば、同じ人物が継続的に出てきていれば、ストーリー性が上がり、面白くなる場合がある。

メインの教材と副教材を使っていれば、スタイルが違うけど、カバーする言語項目が似ていれば、楽しみながらメインの教材で一応学んだことを副教材で強化したりすることができる。

電子の学習ツールが好きであれば、語彙暗記ソフト以外にゲーム感覚のソフトも使う、あるいは海外の人たちと直接コミュニケーションを取れるようなSNS等を使うというパターンも良いであろう。

さいごに

外国語を学ぶというのは、未知の世界への一種の冒険であるので、冒険心を持つことが望ましい。新しい表現を使ったり、新しい勉強法を試したり、新しい人とコミュニケーションをとったりすることによって、継続的な進歩ができ、また楽しい経験にすることができる。

参考文献

Krashen, S. D. (1981). *Second language acquisition and second language learning*. Oxford: Pergamon Press.

Krashen, S. D. (1982). *Principles and practice in second language acquisition*. Oxford; New York: Pergamon.

Krashen, S. D., & Terrell, T. D. (1988). *The natural approach: Language acquisition in the classroom*. Harlow, UK: Prentice Hall/Pearson Education. (Original work published 1983).

Pimsleur, P. (1967). A memory schedule. *Modern Language Journal, 51*(2), 73-75.

Swain, M., & Lapkin, S. (1995). Problems in output and the cognitive processes they generate: A step towards second language learning. *Applied Linguistics, 16*(3), 371-391. doi:10.1093/applin/16.3.371